

Title	REAPPRAISAL OF PEDESTRIAN SYSTEMS IN THE RESIDENTIAL AREAS OF NEW HOUSING DEVELOPMENTS
Author(s)	Tanimu, Tanko Osman
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/37883">https://hdl.handle.net/11094/37883</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	タニム タンコ オスマン Tanimu Tanko Osman
博士の専攻分野の名称	博士（工学）
学位記番号	第 10261 号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科 建築工学専攻
学位論文名	REAPPaisal OF PEDESTRIAN SYSTEMS IN THE RESIDENTIAL AREAS OF NEW HOUSING DEVELOPMENTS (住宅地開発における歩行空間計画の評価に関する研究)
論文審査委員	(主査) 教授 紙野 桂人 (副査) 教授 岡田 光正 教授 梶崎 正也

### 論文内容の要旨

第一章：この研究は先進国（日本）と発展途上国（ガーナ）の歩行システムを対象とする。これらの二つの国（異なったテクノロジーの背景を別として）は異なった文化的背景を示している。この研究の目的はそれぞれの二つの国の歩行システムの発展過程を調べ分析することである。そして特に先進国から発展途上国へ、経験を生かすことによって両方のシステムを改良する可能性があるかどうかを考察した。

第二章：第二段階では、まず歩行空間の現地を観察し、その次にアンケート調査を行い、そしてこの二つの結果を分析した。そして最後に日本とガーナへの提案を行い、結論をまとめる。まず歩行者と車の分類について考察した。

第三章：歩行システムの基本的概念の研究を取り扱う。まず歩行者と車の分離について考察する。RADBURN システム、BUCHANAN 原理、BROW と WOONERE のようなあらゆる概念の歩行システムをもとに研究が進められた。

第四章：調査例として日本（千里、泉北、多摩ニュータウン）、ガーナ（Tema ニュータウン）とイギリス（Cumbernauld と Milton Keynes）の歩行システムを用いている。それぞれのシステムの問題点を見つけ出す目的で調査研究を行った。本研究結果を補うために Alpha Analysis システムを用いて歩行者空間の分析を行った。

第五章：アンケート調査を通してこれまでに明らかに出来なかった事実を確認し、発見するものである。西神ニュータウンで二つのゾーンが選ばれた。観察調査の結果を考慮し、その場所に適合したライフスタイル、利便性、快適性、安全性などの概念を用いてアンケートが作られ、二つのゾーンに適応さ

れた。この調査の目的は住民の社会生活と人間の移動とその相関を探るためである。もう一つの目的は研究の調査結果を確認するためである。

第六章：計画の政策、歩行者の施設の供給に関する幾つかの提案があげられた。ガーナの場合において歩行者の基本的な施設の供給が望ましいと思われる。

第七章：結論として、年々歩行システムが改善されているとはいえ、基本的な誤りが未だに起きている。最近のニュータウンはより最新の歩行システムの開発を積極的に行ない計画の政策の再検討が必要である。ガーナのシステムは計画と整備の面で日本から多くの技術を取り入れる価値がある。

## 論文審査の結果の要旨

近年の生活環境整備における快適性追求の立場から、住宅地開発においても外部歩行空間のあり方について関心が高まり、そのアメニティ向上が求められている。

本研究は、これまでに実施されてきた世界の住宅地開発における、歩行空間の計画原理とその発展を検討し、一定の実例についてその現況の具体的な調査に基づく評価を加え、特に先進国と発展途上国における住民の生活様式の比較との関連のもとに、これに適合する歩行空間計画の指針を得ようとしている。その成果を要約すると次のとおりである。

- (1) 歩行者交通と自動車交通との関係（分離・混合）に関する計画原理の歴史的展開の体系的検討により、それぞれの原理の特徴を分析している。
- (2) 日本・ガーナ・英国のそれぞれ代表的なニュータウンにおける歩行空間システムに対する Alpha Analysis による空間的特性の分析、利用実態に関する綿密な観察調査により、生活様式の特徴に基づく歩行空間使用の様態との関連において、それぞれの有する問題点を抽出している。
- (3) 歩行空間システム計画の最近の代表例として、西神ニュータウン（兵庫県）を取り上げ、住民の利用ならびに意識に関する質問紙調査を行い、通勤・通学・買物等日常生活の空間的構造と歩行空間システムとの不適合を抽出し、さらに、歩行空間デザインにおける問題点を指摘している。
- (4) 歩行空間システム計画における生活実態との不適合ならびにその原因の分析に基づき、それに対する新しい計画原理を考察し、外部空間の使用における生活様式上の特性に注目した提案を導いている。

以上のように本論文は、住宅地開発における歩行空間システムの計画的整備に関する基礎的知見を導いたものであり、都市計画学ならびに建築計画学に寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。